

## 発掘調査の概要

### 藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第205次)

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、昨年5月から12月まで、藤原宮大極殿院東北部において発掘調査を実施しました。11月7日(土)に現地見学会を開催したあとは、藤原宮造営期の遺構の状況確認を目的に調査を進めました。

造営期の遺構の中で特筆すべきは、東面回廊基壇の下からみつかった2本の木杭です。この杭は、基壇を造る前に地面に打ち込んだもので、基壇を造る時には上部を折り取って、その上に基壇土を積んでいました。杭は直径が4～5cmと細いですが、2本のうち1本は、長さ80cmほどが残っていました。

杭の位置は、南北に延びる東面回廊の棟通りの真下にあたり、みつかった2本の杭を結んだラインは、回廊の中軸ラインとほぼ一致します。このような検出状況・位置を考慮すると、これらの杭は、大極殿院の回廊の位置を設定する際に使用された基準杭であった可能性があります。今回検出した2本の杭は、10mほど離れていましたが、同じような杭をある程度の間隔を空けて打ち、それらを基準として回廊の基壇の幅等が決められたと考えられます。

このような杭は、藤原宮の過去の調査では確認されていません。今回みつかった2本の細い杭は、古代の宮殿建築の造営方法を具体的に示す貴重な証拠といえます。(都城発掘調査部 若杉 智宏)



回廊の基壇の下からみつかった杭(北東から)